

---

# 私と彼女の話

ありすきゃろる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と彼女の話

### 【コード】

N5904I

### 【作者名】

ありすきゃるる

### 【あらすじ】

夜の散歩の途中。私は不思議な彼女に出会った。その出会いが私を変えた…

## 始まり始まり（前書き）

ジャンル。

よくわからないからとりあえず文学。

その他でもよかったけど。

文学のほづがかっこいいから。

では、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

## 始まり始まり

私が彼女にであったのはある夜の事です。

私は夜の散歩が趣味なの。嘘です。最近では眠れなくて、たまに夜歩  
きすることがあるの。こっちは本当ね。

あんまり夜は好きじゃないのだけど。たまには夜中に歩くのはなか  
なか悪くないね。私が住んでいる土地は田舎。田舎というほど田舎  
ではないけど、都会とはいえない。畑があれば田舎かな。畑とい  
うより田んぼか。田んぼがある環境は田舎と言えるね。ということ  
で田んぼがある環境である土地ということ、ここは田舎。

車はほとんど通らない。夜だからね。静かというわけではない。  
カエルの声がうるさい。あいつらはなんであんなに鳴いているのだ  
ろう。人間の赤ちゃんだってあんなに鳴かないのに。仲間を呼んで  
いるのだろうか。寂しいのかな。許してあげよ。優しくさね。人間だ  
もの。傲慢さだね。上から目線。とはいえ、うるさいけど嫌いなわ  
けじゃないよ。あれがないと、夏という感じがしないの。子守唄気  
分。眠れないから効果はないけどね。  
さて、カエルの合唱を聞きながら、月明かりの下ぶらぶら歩いてい  
た。そんな夜に彼女に出会った。

？

月明かりのなかで、稲と田んぼの水が風で流れている、なかなか素晴らしい光景。風情があるというのはいくつものことを言うのかな。でもカエルの声がこの光景には合わないの。カエルは「動」な感じ。月明かりと稲の動きは「静」な感じですよ。わかるかなあ。静かなんだ。月はわかりやすいよね。田んぼの動きは、静かにあるがままに動いている。自然を感じる。人間が作ったものだけだね。だからかな。生きている感じがしないの。でもそれがいいね。さて、私はカエルと月と田んぼ。どれなのかなあ。とか考えつつ、歩いていると交差点にたどり着いた。

交差点の真ん中に人がいた。

動揺しました。夜とはいえ交差点の真ん中に人いたらびっくりしますよ。いや夜だから？というか人？幽霊じゃないのかなあ、あれ。白いワンピースに、長い黒髪の女性。しかも美人。まさに幽霊。よくみるとぼんやり光っているように見えてきたし。発光しているのかなあ。薄幸な気配は漂っているけど。確実にどうでもいいけど。

彼女は、空を見上げていた。周りは一切気にしていないようだ。とつか気にするほど周りに何かあるわけじゃない。あるのは大きな田んぼとおそらくたくさんのカエルと1つの月とたくさん星の星。そして私。

さて、ここで私はどうするべきなのかな。声をかけるのは怖い。だつて幽霊に見えるし。夜つて怖いんだ。それに幽霊が合わさつたら最悪です。

彼女はずつと空を見上げている。きっと私から話かけなきゃ大丈夫。つまり全ては私しだい。

夜の会話か。夜の散歩か。  
さすがに生きるか死ぬかの選択ではないと思うけど。

？

私の人生は無計画。

それが良いとは思わない。しかし、悪いとも思わない。先のことを考えると怖くなるのは私だけ？言葉にできない、文字にもできない。そんな恐怖を感じるのは私だけ？そんなことを考えつつ、私は彼女の前を通り過ぎた。話しかけない。怖いから。怖いものからは逃げ出したい。触らぬ神に祟りなし。だから先のことは考えない。考えないで、先延ばす。それが私の生き方だから。

そんな風に言い訳しつつ、彼女のことを忘れます。努力します。それが幸せな気がする。幸せになりたい。それが私の唯一の望み。カエルの声が私を励ます。

稲の動きが私を惑わす。

月が私を笑ってる。

そんな、気がする。

？

私は何一つできない人間。

みんなに迷惑ばかりかけて生きている。そんなやつ早く死ねばいいのにと思っけど。私はまだ死にたくないの。それが本当。嘘じゃないよ。こうやって夜、一人で歩いているとそんなことばかり考えてしまう。困ったものね。それなら歩かなきゃいいのに。それでも歩くということは、私がそれを望んでいるということだろうか。自分が傷つくのを望んでいる？下らない。こういうのをなんていうんだっけ。ヒロインシズム？なんか違う。まあ、被害者気分がいい気分ということかな。いやな性格だね。

そんな風に、マイナス志向に自己分析しながら歩いている。相変わらずカエルは元気だね。羨ましい。あいつら悩みとかあるのだろうか。あつたとしても人間みたいに悩まないだろうなあ。ひと夏の命だしね。いや冬眠するの？まあいいか。

田んぼの稲もそよそよと動いている。あいつらは悩まないだろうなあ。植物って生きているっていうのはわかるけど、考えているとは思えないし。ひと夏の命だしね。月はどうだろう。星は生きているかなあ。まあ生きていると、しておきましょう。でも、考えているとは思いたくないね。うん。なんか性格悪そうだし。絶対恨んでいるだろうし。地球のせいであいつ動けないから。たぶん恨んでいるから、引力とかで人に影響与えているのね。陰険だね。とか、下らないこと考える私。一種の逃避です。

さっきの彼女にも悩みはあるのかな。彼女の姿を思い出しながら、そんなことを考えていた・・・

？

運命という言葉をよく聞く。

運命は変えられるかどうか。よく使われる問題。悲惨な運命を変えるために頑張る、主人公。よくいるよね。たいていは、変えることができてハッピーエンド。みんな幸せに暮らしました。でも、運命が本当にあるとしたら変えることはできないと、私は思う。運命とは決められていることをあらわす言葉だよ。じゃあ変えることができたなら、変わることが出来た方が本当の運命の道筋だったわけだよ。つまり、悲惨な運命と思っていたほうは、運命じゃなくて変えることが運命だったわけだよ。やっぱり運命は変えられない。全ては最初から決められている。きつとそうに違いない。私は誰かの操り人形。当然、こんな風に考えるのも決められているのでしょ。うね。

さて、私がどうしてそう思ったのか。それは、気づいたらまた彼女がいる交差点にたどり着いてしまったから。どうして戻ってきてしまったのだろうか。ぼんやり歩いていたのだけなのに。カエルの合唱を聞いていただけなのに。交差点なのだから、四方向辿り着く道があるのだけど、まさかまた戻ってきてしまうとは。運命を感じてしまう。話しかけないと前に進めないということなの？ 覚悟を決めないといけないの？ それが正しい選択なの？

カエルは答えない。稲は答えない。月は答えない。

神様なら答えてくれるだろうか。

？

彼女は先ほどと全く変わらず、空を見上げていた。

月を見ているようには見えない。ただ空を見ているように見える。

やはり周りは気にしていないようだ。今回も私が話しかけなければ大丈夫のはず。

さて、話しかけるべきかな。時計を持った白兔を見つけたら、追いかけないわけにはいかないの。そうしないと何も始まらない。彼女からはそんな気配が漂っている。声をかけないといけない気がする。でも、私は強制されるのが嫌いな。絶対にこうしなさいと言われるたら、絶対にそうしない。意地ってやつだ。彼女には悪いけど、今回も声をかけずに通り過ぎてしまいましょ。だって怖いし。まだ幽霊に見えるし。

そんな風に決意を固め、彼女のよこを通り過ぎた。

もう家に帰ろう。そう決めたけど・・・

運命は変えられない。

嫌な予感がした。

結論から言うと、家に帰れない。

よくわからないけど、帰れない。というか、今自分がどこにいるかがよくわからない。だから帰る道順もわからない。故に、家に帰れない。困った。あと、薄々気づいていたけど、車が全く通らない。ここは確かに田舎と呼ばれる場所だけど一台も通らないのはおかしい気がする。

何かがおかしい。昨日の夜とちょっと違う気がする。変わらないの

は、カエルの声と稲の動きとお月様。

そういえば、月が変わっていないのはおかしい気がする。だいぶ時間が経っていると思うのだけど、月の位置が変わっていないような気が……。

いや、月の位置が変わるほど私は歩いていたの？時間の感覚も狂っている。

アリスは、白兔にあった時点で不思議の国に迷い込んでいたのかな。追いかけるなければ大丈夫というのは甘い考えだったのかな。

カエルの声が私を急がせる。

稲の動きが私を誘う。

月が私を狂わせる。

そんな、気がした。

？

結局私は彼女に話しかけなければいけないみたい。嫌だけど、認めたくないけど、やはりそれが運命なのだろう。それを決めたのが誰かは知らないけれど、運命に逆らうのは無理なのだから。勇気を出して話しかけよう。そう決意した。

「ご都合主義というか、運命というか、彼女がいた交差点に辿り着いた。彼女は相変わらず空を見上げている。飽きないのだろうか。さて、何て声をかけようかな。そこまでは決まっていなと思う。「こんにちは」か「こんばんは」かな……。いや、「何しているのですか」が一番かな……。」

私は話しかけるのは苦手なのに。考えるのも苦手なのに。何でこんなことしているのだろう。

一体誰のせいであんなことになったのだろう。

彼女のせい？

カエルのせい？

稲のせい？

月のせい？

私のせい？

誰も答えてくれない。

彼女なら答えてくれるだろうか。

？

「ねえ」

彼女が私に声をかけてきた。こちらを見ずに話しかけてきた。先に話しかけられた。

少し安心した。

彼女は私に気づいていた。それだけで安心した。

「あなたは何をしているの？」

彼女の声は澄んでいた。彼女の声はきれい。見えないけれどそう感じた。

「私は夜の散歩の途中です」

今となつては、散歩とは呼べないけれど。

私は何をしているのだろう。

「あなたは何をしていますか？」

「どうしてあなたは散歩しているの？」

私の質問は無視のようです。

困った。

私これからどうすればいいのか全くわからないのに。

彼女は答えてくれないのかしら。

「眠れなかつたからです」

とりあえず答える。

「それは理由にはならないわ。眠いからというのは散歩をする理由にはならない。眠くなるためなら他にもいくらでもやり方があるわ。それなのに散歩なんて。眠るために行なう手段ではないわ。

それにあなた夜が嫌いでしょ？」

理由を否定された。そこまで否定することなのかな。しかも、こつちを見ていない。

彼女は相手を見ながら会話しなさいと、教えられなかったのかな。どうでもいいけど。



？

「夜が嫌いってどうしてわかるのですか？」

「なんとなく嫌いそうに見えるから。違った？でも多分間違っ  
ていでしょうから謝らないわ。だってあなた全然楽しそうじゃない  
もの。夜が好きなら楽しそうにするものでしょ。それが普通だわ。そ  
れでどうして散歩しているの？」

「だから、眠れなかったからですよ。それ以外に理由はありませ

」

「だから、それは理由ではないわ。もしかしてあなた自身気づいて  
いないのかしら。確かに自分の全ての行動の理由を知っている人は  
あまりいないわ。自分でどうしてこんなことをしているのか。それ  
に気づかず行動してる。そしてなんとなく理由をつけて納得する。

人間ってそういうものよね。自分のことを正確に知っている人間が  
どれだけこの世にいるのかしら。

あなたは自分を知っているの？」

よくしゃべる人。私が最初に感じたイメージとは合わない。相変わ  
らずこつちを見ない。外見は月のようなのに、中身はカエルに近い  
のかもしれない。何かを話しているのはわかるけど、頭には入って  
こない。カエルの鳴き声と同じようなもの。耳障りか心地よいかの  
違いだけ。彼女に意味があるとは思えない。

彼女に話しかければどうにかなると思っただけど、それは間違いだっ  
たのかもしれない。

そんな、気がした。

？

「私のことはどうでもいいのですよ。あなたは誰なのですか？」

「私のことはどうでもいいのよ。今はあなたの話をしているの。自分のことを知るといふことは世界を知るといふことなのよ。世界を見ているのはだれ？世界を聞いているのはだれ？世界を感じているのはだれ？あなたでしょ？それならあなたを知るといふのは世界を知るといふことでしょ。世界を知れば全てを知ることが出来るわ。世界とは全てという意味なんだから。さあもう一度聞いわ。あなたは自分を知っているの？」

「・・・知っていると思いますよ。」

「それならもう一度聞いわ。どうして散歩しているの？」

「だから、眠れなかつたから・・・」

「だからそれは違うでしょ？眠れないなら別の手段がいくらでもあるわ。どうして薬を飲まないの？どうして本を読まないの？どうして眠くなるまで布団の中にいないの？リラックスする方法なんていくらでもあるでしょ？疲れるためにする運動なんて家の中でも出来るでしょ？それなのに。どうして。わざわざ。

嫌いな夜に外に出て散歩なんかしているの？」

「なんだか疲れる。彼女は私を不安定にさせる。首痛くないのだろうか。」

「・・・夜に散歩すると、いつもと違うことが起こる気がするからです。」

その結果が今の状況だとすると、期待通りということになるのだろうか。

「そう。そうなの。それで何かいつもと違うことが起きたのかしら？」

「起きましたよ。今の状況がすでにいつもと違いますよ。」

「今の状況がいつもと違うの？どこが違うの？」

「全てが違いますよ。昨日の夜とは全くの別物です。」

「具体的には何が違うの？」

「先ほどから、車が一台も通りません。稲の動きも止まりません。カエルの鳴き声が変わりません。月の位置も変わりません。世界が止まっている気がします。動いているのは私だけという気がします。」

「彼女が動かないのも、もしかしたらそういうことかもしれない。今の時動いているのは、私だけなのかもしれない。そんな風に考えていると、彼女がこちらを向いた。」

彼女の眼からは、生きている光が感じられなかった。澱んでいる光が見えた。

それなのに、その眼からは力強い意思が感じられた。

彼女は私を見ながら、言った。

「それはあなたの気のせいよ。勘違い。夢見がちな人間ね。」

？

彼女は私を見ながら続けた。

「全く勘違いも甚だしい。恥ずかしくないんですか。そんな風に考えるなんて。世界が止まっている？そんなことあるわけないじゃないですか。もつと常識をもって下さい。常識を大切にして下さい。寝言は寝て言うから許されるのよ。起きて言ったら世迷言だわ。知らない人にそんなことを言うなんて。

頭がおかしいと思われてもしかたがないと思わない？」

言いたい放題とは正にこのこと。彼女は口元を少し綻ばせて話している。

あれは微笑というか、嘲笑にちかい。

「そんなこと言われても、実際に車も通らないじゃないですか」

「そんなの夜なんだから当たり前でしょ？あなた今何時だか知ってるの？二時よ。二時。草木も眠る丑三つ時よ。そんな時間に車が通るわけないじゃない。そうね。確かに都会なら通るでしょうね。でも周りを御覧なさい。ここには田んぼしかないわ。街灯すら見当たらないじゃない。月明かりで照らされてるわ。空を御覧なさい。あんなに星が見えてるわ。そう。ここは田舎よ。あなただってここが田舎だと思ってるでしょ？田舎の朝は早いわ。だから夜も早いのも常識よ。そんな田舎ならこの時間帯に車が通るわけないじゃない。逆に車が通るほうが異常だと思わない？つまり。車が通らないのはいつもと同じことよ。

違うことじゃないわ。」

「稲の動きは・・・」

「風が吹いているんだから当たり前でしょ？あなた風が吹いているのに気づいていないの？風が吹けば稲が動く。そんなの当たり前じゃない。この夜風が気持ちいいのよ。稲も楽しそうに動いているじゃない。稲の動きを見ると落ち着くわ。順番に倒れていくの。そして

またすぐに起き上がるの。また倒れるために。とても素敵だわ。今も規則正しく倒れているわ。規則正しく起き上がるわ。何が問題なの？私には問題になるようなところが一切見つからないわ。問題があるように思うほうがおかしいと思わない？つまり稲が倒れるのはいつもと同じことよ。

違うことじゃないわ。

「

彼女にそう言われて、私は初めて風が吹いていることに気づいた。しかし、彼女はいつ稲の動きを見たのだろう。空しか見ていない気がしたのに。

後ろに目でもあるのだろうか。

？

「カエルの声は言うまでもないわね。カエルが鳴くのは普通でしょ？カエルの鳴き声が変わらない？あなたはカエルの鳴き声の違いがわかるの？一匹一匹のカエルの鳴き声が？そんなわけないわよね？今まさに一匹のカエルが鳴くのをやめたところでああなたはわかるの？わからないでしょ？わかるわけないじゃない。当然ながら夏にカエルが鳴くのは全く普通。おかしいことなど何も無いわ。逆に夏にカエルが鳴かないほうが異常だわ。つまり。

このカエルの合唱は普通である証拠ね。」  
確かにそうだ。どうして私はおかしいと思ったのだろう。わからない。よくわからない。

「それから月？月の位置が変わらない？あなたはこの短時間で変わる月の位置がわかるの？わかるわけないわよね？あなたは月をずっと見ていたわけ？違うでしょ？そんなことをしてるのは私くらいよね？熱心に見てもいない月の位置を変わっているかどうかなんてあなたにはわかるの？わからないでしょ？それなのに月の位置が変わらない？よく言えたものね。月は動いているわよ。普通に。淡々と。なんら変わらず。さつきから。緩やかに。静かに。私たちを見下しながら。動いているわ。至って正常。

異常なんて見当たらないわ。」  
わからない。何を言っているのかわからない。  
彼女の言うことが正しいの？

わからないのは私だけ？  
間違っているのは私だけ？

？

「・・・確かに車も稲もカエルも月も、おかしくないかもしれせん。普通かも知れませんが。でも、明らかにあなたはおかしい。こんな夜にずっと空を見上げているなんて、おかしいですよ。」

「そうだ。そうなのだ。彼女がおかしいのだ。彼女の存在は明らかに浮いている。異質だ。異常以外の何物でもない。」

彼女は間を置かず話し出す。

彼女の声は、何も思っていないようにも聞こえるし、怒っているようにも聞こえるし、どうでもいいと思っっているようにも聞こえてくる。不思議な声。

「私が？おかしい？どこがおかしいの？夜に出歩いていること？それはあなたと同じよね？ずっと空を見上げていること？空を見るのは普通よね？誰でも空を見上げるでしょ？見下ろす人はいるかしら？いないわよね？あなたは私がずっと空を見上げているといったわね？私がずっと空を見上げていたとどうしてわかるの？あなたは私をずっと見ていたの？」

「違うでしょ？」

「そうですね。でも、私が見かけたときはいつも空を、見ていた？そうですね。あなたが近くにいたときは空を見ていたかもね。でもだからといってあなたが見ていないところでも見ていたことになるのかしら？ずっと空を見ていたことになるのかしら？そうですね。例えばあなたが宝くじの一等が当たった人を見たとしてもしょうか。あなたは彼もしくは彼女が運のいい人だと思っかしら？思っかもね。でもその彼もしくは彼女は今までに二百万枚買ってるかもね。それでも彼もしくは彼女は運がいいといえるのかしら？あなたは自分が見た情報が絶対的のように思っっているみたいね。それは間違いない。私がおあなたが近くにいるとき空を見ていたのはあなたと眼を合わせたくなかったから。あなたに話しかけてもらいたくなかったか

ら。あなただつてあるでしょ？知らない人と眼が合いそうになると違つてこを見ること。作業をしているように見せること。寝たふりをする事。私が空を見ていた理由はそういうことよ。普通でしょ？どこにもおかしいことはないでしょ？」

確かにそうだ。何にもおかしくない。彼女は普通だ。異常なところなど見当たらない。

でも、そういうことなら、

「そろそろ気づいたでしょ？」

おかしいのはあなたよ。」

？

「おかしいのは・・・私？」

「ええ。そうよ。あなたがおかしいのよ。それ以外はおかしくないわ。全く。微塵も。普通よ。この世には普通が満ち溢れてるわ。普通で出来てるのよ。奇跡なんてないわ。あるのは努力よ。神なんていないわ。いるのは人だけよ。その中でごくたまに普通ではないものがあるわ。それが異常よ。おかしいということ。不確定要素。そして。そういうものは排除されるわ。当然よね。だって。

それが普通なんだから。」

「でも・・・私は・・・」

「じゃあ聞いわ。あなたに質問するわ。いいでしょ？問題ないでしょ？あなたが普通なら答えられる質問よ。逆にあなたがおかしかったら答えられないわ。さあ答えて見なさい。まず聞いわ。

あなたのお名前は？」

「私の名前は・・・」

あれ。

何だっけ？

私の名前は何だっけ？

思い出せない。

どうしてだろう。私には名前があるはずなのに・・・。

「どうしたの？答えられないの？自分の名前を？こんな簡単な質問を？こんな簡単な問題を？絶対にテストにでる問題よ？これは。国語。社会。数学。化学。英語。どのテストにも出るわ。あなたのお名前は？しかも配点はとても高いわ。いえ。配点なんか無いわ。でもこれに答えられないと零点なのよね。理不尽よね。さあ。

あなたは零点かしら？」

「私は・・・」

誰だっけ。



？

「答えられないの？自分の名前を？へえ。そうなの。答えられないの？それでも普通というの？いえ。まあいいわ。どの問題に答えるかはあなたが決めることよね？名前を最初に書かない人もいるらしいわ。私は真つ先に書くけどね。名前はとても大事なものだから。名前を書いて。その紙を私のものにするの。神でもいいわ。それを私の場にするの。名前を書けば私のものなの。そうでしょ？だから生まれた人に名前をつけるの。それを私たちのものにするためにね。それを神様が連れてかないようにね。それほどまでに名前は大事なの。でも。いいわ。私は優しいから。じゃあ聞いわ。第二問ね。

あなたの家はどこかしら？」

「私の家は……」

あれ。

何処だっけ？

私の家は何処だっけ？

思い出せない。

どうしてだろう。私には家があるはずなのに……。

「どうしたの？答えられないの？自分の家を？帰るべき場所を？自分のいるべき場所？自分を待っている人たちがいる場所を？あなたは答えられないの？まさか住所を覚えてないとは言わないわよね？まさか家の場所を忘れたとは言わないわよね？そんなわけないわよね？もしそうなら。」

あなた家に帰れないじゃない。」

「私は……」

何処に、帰ろうとしていたのだろう。

？

「また答えられないの？困ったものね。こんな簡単な問題なのに。答えられないの？本当に？こんな常識を？こんな普通のことを？あなたは答えられないの？困ったわ。あなたが何を答えられるのかが私には全くわからないわ。どうやら。私とあなたは全く違うものよ。よね。だからあなたが何を考えてるかもわからないわ。だからあなたが何を答えられるのかもわからないわ。だから。次の質問はこれにするわ。」

あなたは何？

「.....」

何って、何？

「質問がわかりにくかったかしら？つまり。あなたの個人情報を聞いているのよ。あなたは何型？身長は？体重は？誕生日は？年齢は？性別は？家族構成は？趣味は？好きな食べ物？嫌いな食べ物は？好きなタイプは？嫌いなタイプは？あなたが何を答えられるかわからないから。全てを一度に聞いてあげたのよ。これなら。答えられるでしょ？さあ。どうぞ。存分に自分のことを語りなさい。」

あなたは自分のことを知っているんでしょ？」

「私は.....」

あれ？

何一つ思い出せない。

何型だっけ？身長は何cmだっけ？体重は何kg？

いつ生まれた？何歳だ？

男なの？女か？

家族はだれ？

何が好き？何が嫌い？

私は・・・

何だっけ？

誰か知ってる？

私を。

月なら知ってる？

稲なら知ってる？

カエルなら知ってる？

神様なら知ってる？

彼女なら知ってる？

私は知らない。

私を知らない。

？

「答えられないみたいね。あなたは何も答えられないのね。自分のことを何一つ答えられないのね。自分のことを。自分自身が。何一つ。答えられない。これが一体どういうことかあなたにはわかるかしら？わからない？わからないでしょうね。だって。あなたは自分のことがわからないんだものね。自分のことがわからないのにそれ以外がわかるわけないわよね？言ったわよね？自分を知るといふことは世界を知るといふことである。と。覚えてるかしら？つまり自分がわからないといふことは世界がわからないといふことよ。世界とは全てという意味でもあるわ。これも前に言ったわね。今。あなたは自分のことを知らない。つまり全てを知らない。わからない。だから今が一体どういう状況かもわからない。だから私が教えてあげる。私が。あなたの。全てを教えてあげるわ。問題ある？ないわよね？だってあなたは何もわからないんだから。何が問題かもわからないでしょ？」

「もうなんでもいいですよ。おしえてください。」

「自分で自分がわからないといふことはもう死んでいるのと同じことよ。」

「どういいういみ？」

「つまりあなたは幽霊よ。本来ここに在るべき存在じゃないのよ。だからここが異常に見える。異常に感じる。」

「だってここはあなたが在るべきところじゃないもの。」

「わたしは、ゆうれい？」

「ええ。そうよ。あなたはあなたを知らない。私もあなたを知らない。カエルもあなたを知らない。稲もあなたを知らない。月も当然あなたを知らない。あなたを知っている物は何も無いわ。つまりあなたは何でも無い。何も無い。いてもいなくても同じ。いたところで意味がない。そんな存在。そんな存在を何て言う？幽霊と言ふの

よ。幽霊といふのはいてもいなくてもどうでもいい存在。いなくても困らないし。いても別に関係ない。まあ少し怖いけど。ただそれだけの話。透けてるとか。足がないとか。死んだ人間が現れるとか。幽霊はそんなものではないわ。幽霊は存在しない物のことよ。誰も知らない物。

それが幽霊よ。」

？

「でも、わたしのことをしっているひとが、いるかもしれないじゃないですか。」

「そうね。いるかもしれないわ。あなたのことを知っている人が。でも。あなたはそれを信じる事が出来るの？あなたはそれを信じるの？無条件で？何の基準もなく？本来基準は自分の中にあるものよね？でもあなたにはそれが無いわ。つまり。あなたは嘘を見分ける事が出来ないということよ。つまり。あなたは何が本当かわからないということよ。私はあなたのことを知っている。そういう人がいたとしても。それが正しいかはわからないわ。もし。あなたを知っている人が複数いて。みんな違うことを言ったらあなたはどうするのかしら？人によって変わる物。自分1人じゃ存在できない物。他人が認めても存在出来ない物。まさに幽霊みたいじゃないかしら。」

「・・・じゃあ。わたしはこれからどうすればいいの？」

「あなたのしたいようにすればいいじゃない。といつても。あなたにしたいことがあるのかは知らないけれど。一応聞いてみようかしら。あなたにはしたいことがあるの？」

「わたしのしたいことですか？・・・そうですね。その質問には答えられませんよ。私はどこか遠くに行きたい。そして私を知っている人を見つきたい。それが本当かなんか知りません。とりあえず、ここには居たくない。」

「そう。そうなの。ここには居たくないの。それなら簡単だわ。歩けばいいのよ。進めばいいのよ。たったそれだけのことよ。誰にでも出来ることよ。何物でも出来ることよ。それが人じゃなくても。物じゃなくても。幽霊でも。それじゃ。さようなら。もう二度と会うことはないでしょうね。いえ。もう二度と会いたくないわ。」

「さようなら。」

「およろなら。私も二度と会いたくありません。」

めでたし、めでたし。

そして彼女は去っていった。

彼女が何処から来たか私は知らない。

彼女が何処に行くか私は知らない。

彼女が誰だったか私は知らない。

彼女が何だったか私は知らない。

彼女が何をやりたいかも知らない。

彼女を知っている人も知らない。

私は彼女について何も知らない。

私を知っていることは。

この世界は普通だということ。

この世界に異常はないということ。

不思議なことがあっても。

それがあるべき姿ということ。

月は綺麗だということ。

カエルは元気だということ。

稲は優しいということ。

神様なんていないということ。

ただそれだけのこと。

それを確認するために。

私は今日も夜の散歩に出かける。

私は今日も月を見上げる。

めでたし、めでたし。(後書き)

よくわからない終わりかたでした。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5904i/>

---

私と彼女の話

2010年10月11日04時59分発行